



Title	地下生活者の方法 : ドストエフスキイにおける分裂の問題
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学学報. 1979, 44, p. 65-80
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80742
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

地下生活者の方法

——ドストエフスキイにおける分裂の問題——

武 藤 洋 二

Метод подпольного человека
--- Вопрос о раздвоении у Достоевского ---

МУТО Ёдзи

Содержание

- 1 Симфония подпольного человека
 - 2 Подпольный человек как дирижер
 - 3 Функция идеи
 - 4 Функция сознания
 - 5 Два двойника
 - 6 Метод молодого подпольного человека
 - 7 Общечеловек
- Примечания

1

地下生活者の主張は、二段がまえになっている。

前段は、せまい図式的な人間観にたいする批判である。

後段は、この人間観にもとづいてつくられた、理想社会の設計図にたいする批判である。

この二段がまへの批判は、地下生活者が理想社会の建設に手をかさなくてもすむようにするための観念操作の材料である。

『地下室の手記』は、地下生活者の意見の宣言書などという静的なものではなく、彼が、理想社会の建設を核とする「美と崇高」の問題から、そして、とどのつまりは、「生きた生活」からそっくり逃げだし、逃避の場としての地下室に安住するために、観念と意識を駆使している記録である。

地下生活者は、逃げながら、逃げる方法を語っている。『地下室の手記』は、その記録である。

地下生活者の発言は、四つの楽章からなる音楽にたとえることができる。

第一楽章 〈理性の領域だけで人間をとらえる、せまい図式的な人間観にたいする批判〉

人びとは、たとえば、 $2 \cdot 2$ が4という数学の公式を前にすると、それは動かし得ないものと考えて、それから先へは進まない。つまり、 $2 \cdot 2$ が4を「石の壁」にしてしまい、その前で立ちどまってしまう。認識活動を「石の壁」のこちら側だけに限ってしまう。

人間を「石の壁」の手前でだけとらえたら、人間の大切な部分が切りとられてしまう。 $2 \cdot 2$ が4で代表される理くつで割り切れるものだけが、人間からとりだされ、割り切れないものは、すてられてしまう。

ところが、人間は、「石の壁」の向う側にもいる。人間活動の大部分は、そして、大切な部分は、「石の壁」の向う側でおこなわれる。

地下生活者は、「石の壁」で人間を切りすてることに抗議する。

このような、せまい人間観にもとづいて、未来社会を設計したら、どうなるか。彼は、批判をその社会の設計図へ移す。

第二楽章 〈そのような人間観にもとづいてつくられた、理想社会の設計図にたいする批判〉

「石の壁」のこちら側だけで人間像をつくりあげ、その人間にあった社会を建設するとしたら、その社会では、「石の壁」の向う側にある人間活動は、最初から除外されている。そこでは、住人は、人間活動の大部分を凍結したままで、生きなければならない。住人は、設計図のもとになった人間観のせまきの被害を、もろにうけることになる。人間の行動は、 $2 \cdot 2$ が4によって割りだされ、一覧表にのっている。住人は、その表にあげられていない行動を、することはできない。

「石の壁」のこちら側に建設される、このような社会を、地下生活者は、水晶宮とよぶ。⁽²⁾ここでは、たとえば、「気まま」の余地はない。「気まま」は、 $2 \cdot 2$ が4でとらえられないから、一覧表にのっていない。

「気まま」は、地下生活者によれば、人間活動の大部分をしめる。それは、理性の命令で動くわけではない。図式にひっかからない、やっかいなしろものである。だから、それは、 $2 \cdot 2$ が4式の人間理解をやっつける便利な武器になる。地下生活者は、そこに目をつけて、「気まま」という石を水晶宮へ投げつける。彼は、それによって、水晶宮と水晶宮のもとになった人間の処理方法とを根こそぎにしようとする。

「気ままは、理性をも、体をかくことをもふくむ全生命の、つまり、人間の全生命のあらわれである。」⁽³⁾

地下生活者は、理性をしりぞけるのではない。彼は、理性をそれ相応の位置にもどすのである。理性だけで人間をとらえることに反対するのである。

たとえば、体をかく行為が、理性のかげにかくれて、みすごされてしまい、この行為を除外して人間をとらえることに、彼は抗議するのである。

地下生活者は、人間の全的理解から全的な生き方へ、話をすすめる。

「まったく、わたしは、たとえば、あたりまえのことだが、わたしの生きるすべての能力にこ

たえるために生きたいのであって、わたしの理性的能力だけ、つまり、わたしの生きるすべての能力のうちの20分の1ばかりだけにこたえるために、⁽⁴⁾「生きたくはないのだ。」

水晶宮は、この願望を、みたすことはできない。それどころか、人間を20分の1にちぢめてしまふ。水晶宮を理想社会だといわれても、地下生活者は、そんなもので手をうつわけにはいかない。

第三楽章〈水晶宮くたばれ、地下室万才！〉

地下生活者は、水晶宮など理想社会ではなくて、蟻塚にすぎない、と思う。彼は、水晶宮にたいして舌をだす。蟻塚の建設のために、レンガ一つ運ぶ必要はない。だから、彼は、水晶宮に背をむけて、地下室にこもっていても、やましさを感ぜないはずである。レンガ運びの問題にわずらわされない地下室万才！

第四楽章〈地下室くたばれ！〉

地下室万才！といいきったあとで、地下生活者は、すぐに告白してしまう。

「ああ、これもうそなのだ。うそである。なぜなら、地下室のほうがいいのでは決してなくて、わたしが、渴望しているのに、どうしても見つけだせない、何か別のもの、まったく別のもののほうがいいのだ、ということ、自分でも2・2が4ほどに知っているからだ。⁽⁵⁾地下室くたばれ！」

地下生活者は、地下室という逃避の場がいいと考えているのではなくて、今まで、舌をださなくてすむような未来社会が設計されなかったことに、はらをたてているのである。舌をださなくてすむような、本物の理想社会の見取図を見せてくれるなら、感謝のしるしに、自分の舌を切りとっていいぐらいに、彼は思っている。

「別の理想をくれ！」⁽⁶⁾

地下生活者は、生身の人間の住める真の理想社会を要求する。

2

地下生活者は、現実から逃げて、地下室へこもっている。彼は、地下室という非現実で、四つの楽章からなる曲を演奏する。

水晶宮よりもましなもの、「別の理想」をあたえられたら、彼は、地下室をでて、その実現のためにレンガ運びをするたてまえになっている。しかし、それは、ありそうにもないので、地下室にこもって何もしないでいることが正当化される、というしくみになっている。

このしくみによって、地下生活者は、逃避のひけめなしに、地下室に居つづけようとする。

このため、彼は、このしくみがうまく作用するように、しなければならない。

彼は、次のような方法でおこなう。

第四楽章で、「地下室くたばれ！」と地下室を否定しても、それに代るものは、あらわれない。地下室から出るあてがない。地下室を否定したままで、地下室に居なければならない。呪いながら、安住することは、不可能である。知識人は、自分の生存方法を正当化しなければ、おちつけ

ない。地下室から出るめどがないなら、「地下室万才！」を再びとりもどさなければならない。

「地下室万才！」は、水晶宮の批判によってみちびきだされた。水晶宮の批判は、その土台になったせまい人間観からでてきた。したがって、「地下室万才！」を呼びもどすためには、第四楽章がおわると、再び第一楽章にまいもどらなければならない。

地下生活者は、地下室にいるために、自分の曲をくりかえし演奏しなければならない。地下室に居ることは、この演奏をくりかえすことである。

地下生活者は、地上（現実）に出ないかぎり、演奏をやめることはできない。

この曲は、彼の心の状態をあらわすので、心内楽とよぶことができる。地下室には、この心内楽がいつもかかっている。地下室は、その音楽をかなでながら、「何かよりよいもの」がやってくるのをまちうける待合室のほうである。

ところが、地上（現実）から身をおくしながら、「別の理想」をまっている姿勢は、実際には、何もしないことにおちついてしまう。理想社会をまつということが、逃避の一形態にすぎなくなる。彼は、地下室を、何もしないですむ場にしてしまう。

彼は、できそこないの理想社会の建設のために何もするものか、という立場を、一般的に何もしない立場へ移行させる。つまり、自分の活動を、あの曲の演奏だけにしてしまうのである。

地下生活者は、何もしないし、何もできない。何もしないとは、観念と意識だけを働かせて、生存することである。穴の中で身うごきもしないで、ただ触角をひくひくさせている虫のように、地下生活者は、地下室のなかで何もしないで、観念をあやつり、意識を働かせている。いいかえれば、地下生活者の無為は、観念と意識とをたえまなく操作することによって保証される。彼は、社会的に政治的に何もしないでいるために、頭と意識とをすりへらす重労働にたずさわっている。知識人の逃避と無為は、高くつくのである。

3

地下生活者は、自分の曲を演奏しながら、次のように観念を操作する。

彼は、理想社会の問題から手をひいて、地下室に逃げこんでいる。しかし、彼は、手をきってしまうことはできない。うしろがみをひかれながら脱走している地下生活者は、地下室のなかで、自分自身の心に沈澱しているものの処理をしなければならない。そのために、彼は、観念を操作する。

彼は、理想社会の問題を問題外にしたい。そうすれば、地下室に安住できる。このためには、同時代の理想社会の設計図が、だめな代物であればよい。建設にあたいしないものであることが、自分でなっとくできれば、地下室にねころんでいても、政治参加の義務感に苦しみられることはない。レンガ運びの代りに、批判を口にすることによって、お茶をにごすことができる。

したがって、水晶宮の欠陥が大きければ大きいだけ、彼には好都合である。それが、人間の住

めそうにない「にわとり小屋」であれば、かえって彼の心は楽である。それが、傷ものであれば、あるほどいい。

地下生活者とは、理想社会像の傷の上に安住しようとする知識人である。

彼は、同時代の解放運動の弱さと欠陥とをつくことによって、政治参加への義務感を葬りさり、「不活動」のひけめからのがれようとする知識人の典型である。

地下生活者が、水晶宮の建設のもとになった考え方、人間観にたいして、猛烈にかみつくとき、人間の一さい合さいを守り、人間を全的に把握し、全的に生きたいという彼の主張と要求は正しい。ところが、問題の中心は、この主張の正しさでなく、目的にある。この主張の目的と彼の地下生活との関係にある。

『地下室の手記』の第一部は、この正当な主張の宣言書ではなく、むしろ、その目的とその展開の方法、つまり、あの曲の演奏の目的と方法との暴露である。

地下生活者は、水晶宮を十分にこきおろし、「レンガ一つ運んでやるものか」というところまで、こぎつけた。うまくいった。彼は、レンガを運ぶ義務感から解放された。彼は、勝にじょうじて、だから地下室のほうがいいのだと、「地下室万才！」へきよに進んだ。これで彼の目的は達せられ、地下生活は正当化された。

ところが、水晶宮の傷に安住できるその瞬間、彼は、傷口に寄生しようとしている自分に気がつき、はっとして、元の自分に帰ってしまう。真の理想社会への願望がおどりでて、水晶宮の傷口にすわりこもうとしている地下生活者を、けりとばしてしまう。

水晶宮が傷だらけであっても、彼は、理想社会建設の問題そのものからは、のがれることはできない。地下生活者は、ごねどくにはならない。それどころか、彼は、自分の心に沈澱しているこの問題の重さとしぶとさに、いらだつ。

生身の人間が、人間のあらゆる可能性を発揮して住める理想社会をのぞむ地下生活者にたいして、同時代人はこたえてくれない。歴史は、それを用意していない。だから、彼は、再びふりだしにもどり、出来そこないの理想社会像をやっつけることによって、理想社会の問題そのものからのがれる作業を、つづけるのである。

地下生活者は、理想社会の問題をふりきってしまうことはできない。彼は、また、自分で本物の理想社会を設計することもできない。この二つの“できない”にはさまれて、彼は、観念と意識の永久運動をやらなければならない。彼は、例の四つの楽章からなる曲の演奏の手を休めることはできない。

彼は、地下室に居るかぎり、こうなのであり、また、地下室に居るために、こうしているのである。

この音楽のなかでは、二つの相反する力が働いている。

真の理想社会を中心点とすれば、観念操作は、この中心点にたいして、遠心力として働き、真の理想社会を求める願望が、求心力として働く。

この遠心力と求心力とが競いあって、地下生活者の位置をきめる。つまり、彼を現状にとどめる。この競い合いは、地下生活者の曲を永久に演奏させる。

4

地下生活者は、観念操作と平行して、次の方法で意識を操作して、自分をささえる。

彼は、たとえば、自分を卑劣だと感じる。彼は、もちろん、おちつかない。ふつうなら、自分の卑劣さをわすれることによって、おちつこうとする。ところが、地下生活者は、逆に、自分が卑劣漢であることをわざと強く意識する。彼は、卑劣漢である自分と、それを強烈に意識している自分とに分れる。分れたうえで、彼は、自分が卑劣漢であることを自分自身で意識しているのだ、ということを強く意識する。つまり、意識していることを意識する。

いいかえれば、彼は、卑劣漢である自分と、卑劣漢であることをわざと意識している自分とに分裂していることを、強く意識するのである。

この分裂を意識することによって、彼は、自分が二つに分裂した自分たちの上に立っているように感じる。彼はこれによって、自分が自分自身より超越しているような錯覚をもつ。

意識の操作によってもたらされた、この自己超越の錯覚を養分にして、地下生活者は、自分をやしなう。

卑劣漢であるという毒は、意識という濾過器をとおると、自己超越の錯覚という養分に変わり、この養分によって地下生活という逃避生活が維持される。

地下生活者は、「地下室万才！」と「地下室くたばれ！」に大きく分裂している。この基本的な分裂の内部で、たえずいろいろな小さな分裂がおこる。地下室という精神的な隠れ家にたいする「万才！」と「くたばれ！」という正反対の立場は、あとでのべるように、水晶宮を軸にして位置づけられる。この両極をもつことは、理想社会の問題をめぐる「半絶望と半信仰」のあいだにることである。

地下生活者は、この「半」と「半」とのあいだでゆれ動きながら、同時に、一方の「半」にいる自分と他方の「半」にいる自分のどちらをも他人のように見て、両者のまん中に、さらに、その上に、立とうとする。

これは、「動揺の熱病状態」のなかに、「快樂のきわみ」を感じとる試みである。

動揺の快樂とは、自分が動揺しているのだ、と自分で意識することから生れる。動揺そのものは苦痛である。しかし、動揺している自分をながめれば、動揺に苦しむ自分から離れたところに今の自分——動揺を意識している自分——が場を占めることになる。これは、動揺そのものを止めることができないので、動揺からくる苦痛（毒）を快樂（養分）に変える操作である。

地下生活者が口にする「快樂」とは、したがって、すでにのべた自己超越の錯覚にひたることから生れる。それは、分裂している自分たちの上に自分が君臨しようとする試みから生れる。

自分がのがれたいと思っているものを、わざと意識することは、一見、ますますその中へ深入りすることになるが、実は、これは、そこから身を引きはなす方法なのである。地下生活者は、のめりこむことによって身をおかわすのである。

もちろん、これは、一時的に身を浮かせるだけである。だから、少しでも意識の手づなをゆるめれば、彼は、すぐさま、どちらかの「半」へころげ落ち、動揺のまっただ中へ自分の全てをおくことになる。

したがって、彼は、動揺の火の中へ落ちないように、休みなく意識を操作して自分を宙に浮かせようとする。しかし、これは、きわめて不安定である。宙に浮いている彼を、他の意識がゆさぶるのである。彼は、宙に浮きながらゆれており、何回も火の中へ落ちてしまうのである。

地下生活者とは、分裂し、分裂を意識し、自分が分裂を超越している錯覚によって、たえず自分をささえていかなければならない人間である。

5

地下生活者は、あることを強く主張するかとおもうと、とつぜん、それを根こそぎに否定する。彼は、自分の強いしつこい発言を瞬間的に消してしまう。そして、全く別のもの、正反対のものを、同じような強さで主張し始める。

地下生活者のこのような主張のしかたは、つまり、分裂のしかたは、次のようなくみになっている。

あるときは、「地下室万才！」をさけぶ地下生活者が読者の前に全面的に出て、これが丸っぱの地下生活者だ、と思わせる。前に出て、他の面をおおいかくしている場合の地下生活者の姿を、前身とよぼう。

これにたいして、前身の影で見えなくなっており、その声も聞けないが、前身の背後にひかえており、自分の出番をまっているものがある。これを後身とよぼう。

前身が、たとえば、「地下室万才！」をさけんでいるとき、後身は、「地下室くたばれ！」をかかえて、今にも前身をおしのけて、とびだそうとしている。前身が自己を表現しているとき、後身は、前身の場をうばおうと、手ぐすねひいて後でまっている。

前身の方は、また、自分の後で自分を否定しきるものが、すきあらば自分の場をのっとうとしていることを感じながら、自己を主張している。後身の存在を感じているため、前身の主張は強い。

地下生活者の意識の分裂は、このような前身と後身との陣取り合戦によって、展開される。それは、前身と後身とのいれかわりによって表現される。

ここにあるのは、自分の内部の異なる部分が、左右に分れて、横にならんで、むかいあって対話するという伝統的な内的対話の方法ではない。右と左の対話ではなくて、前と後の発言権のう

ばい合いである。おたがいに相手の発言権を認めあっておこなわれる対話ではなくて、一方が他方をおさえて全面的に前に出て、他方をおおいかくしてしまい、自分だけで単独にその人間全体を代表しようとする闘いである。

舞台にたとえば、伝統的な内的対話では、それぞれの分身が、同時に、観客（読者）に見える。観客は、分身たちのやりとりを見ている。ところが、地下生活者の場合、舞台には、一人の登場人物しか見えない。観客は、その人物の背後にひかえている者に気がつかず、ただその人物（前身）の発言を聞くだけである。ところが、突然、その人物をつきとばして、背後の人物が舞台の前面に出る。この人物は、さきほどまで話していた人物とは、全く正反対のことを、主張しだす。さきほど前面にいた人物は、新しく登場した人物の後にまわって、その姿は全く見えなくなっている。しばらくすると、再び、前の人物と後の人物が入れかわる。これがくりかえされる。前と後の独演者の入れかわりによって、観客は、分裂を理解する。

伝統的な方法では、最初から分身たちが舞台に同時に姿を見せているので、観客は分裂を静的に理解する。ところが、地下生活者の場合は、分裂が、分身たちの前後の入れかわりによって動的に理解される。

地下生活者の主張がたえず変わるだけでなく、先にのべられたことを完全にくつがえす反対の主張が、一瞬のうちにあらわれるのは、以上のようなしくみのためである。

地下生活者の無数の意識は、それぞれが折衷的に、まだらに、玉虫色にあらわれるのではなくて、排他的にあらわれる。

前身と後身との食うか食われるかの緊張関係は、この排他性の表現である。

この緊張こそは、真の理想社会と水晶宮と地下室とをめぐる地下生活者の観念操作の空転を、あらわしている。なぜならば、彼の観念操作のどの部分も決め手とならないために、彼の内部の諸要素が、たえず激しく闘いあい、そのどれ一つとして不動の地位をしめることができず、永久に闘争しあうからである。

6

今までのべてきた地下生活者の方法と分裂の構造を、今度は、その崩芽的な段階へさかのぼることによって、あらためて分析してみよう。

地下生活者の出発点は、1840年代のペトラシェフスキイ会の時期と一致する。空想的社会主義思想に夢中になった若いドストエフスキイの経験が、若い地下生活者に移入されている。

まだ地下生活を確立していない青春時代の地下生活者は、「美と崇高」の行為にあこがれていた。「美と崇高」は、この場合、空想的社会主義思想の持主が当然しなければならない、人間解放の行為をさしている。地下生活者は、「美と崇高」のための活動舞台が、すっかりおぜんだてられて、自分の前に開かれると思っていた。彼は、さっそうと白馬にまたがり、月桂樹の冠をか

ぶって、「美と崇高」の英雄として、登場するはずであった。

しかし、人間解放の空想的な思想に、歴史は、場所をかしてくれなかった。英雄として、時代の主人公としてふるまえる条件は、自分のまわりにはなかった。彼は、実生活では、白馬とも月桂樹の冠とも無えんな小役人だった。

「美と崇高」のはなばなしい活動舞台にのぼれなかった彼は、それとは正反対のところへ走った。彼は、売春窟という「泥」へむかった。

彼には、「英雄か、泥か」⁽⁷⁾の両極しかなかった。彼は、その中間をさけた。中間とは、月桂樹も白馬もなしに、日常的な次元で「美と崇高」の行為をおこなうことである。彼は、中間をさけて、自分から「泥」へ落ちる。彼は、現実のなかでは、「美と崇高」を行えないのである。中間がない、中間をさけるとは、日常というたしかな現実から逃げることである。

しかし、「泥」のなかに入っても、彼は、「美と崇高」が気にかかる。それへの義務感から解放されない。しかも、「泥」は、彼に自己嫌悪を感じさせる。

「泥」のなかで、おちつくために、彼は、「美と崇高」を夢想する。ここから、地下生活者の初步的な操作がはじまる。

「しかし、わたしには、すべてをまるくおさめてくれる出口があった。これは、『あらゆる美と崇高』へ、もちろん空想のなかで、救いをもとめることである」⁽⁸⁾

しかし、彼は、「有益で、すばらしい活動」の空白のなかで、「美と崇高」の夢想とは全く逆の行為をしている自分を、「のろうほど」に嫌悪している。

このような彼を、三角形であらわすことができる。淫蕩にふけっている自分と、その自分を嫌悪している自分とが三角形の底辺の二角とすれば、「美と崇高」の夢想が頂点の一角である。両端は、この頂点を見上げて、なんとか存在している。この頂点は、両端が好き勝手な方向へとび去って、三角形全体が解体してしまわないように君臨している。底辺の分裂、矛盾、葛藤のしわよせを夢想という頂点がひきうけている。頂点の方は、また、「美と崇高」が行動に移されないで、空想のなかへ凍結されているという自己の性質上、それ自体矛盾をもっている。したがって、頂点の統括力は一時的である。底辺が「美と崇高」の行動をよぎなくされるせっぱつまった場合には、頂点は消え去り、三角形全体がくずれ去る。これは、地下生活者が一時的に地下生活者でなくなる時である。この場合については、あとでのべる。

「わたしは、すでにその当時、心の中に地下室をもっていたのだ」⁽⁹⁾

地下生活者は、青春時代をふりかえってこのようにいう。「心の中の地下室」は、すでにのべた三角形の構造になっている。

彼は、「心の中に地下室」をもちながら、世界から身をかくすようにして生活していた。彼は、自分の住いを「全人類からかくれるための箱」だ、といっている。彼は、この「箱」のなかにとじこもり、分裂している自分の心を自分自身で分析し、その自己分析からひきだした「大小の苦しみ」を、生活の「良いソース」にしていた。彼は、自分の苦しみを薬味にして、生きていた。

これは、すでにのべた「快樂のきわみ」のはしりである。

「美と崇高」を夢想のなかで飼っている人間が、実際に「美と崇高」をしめさなければならぬいはめにおちいった場合、彼の方法はどうなるだろうか。かけだしの地下生活者の方法は、一人の売春婦によって試めされる。

彼は、リーザという売春婦とかかわりをもった。「美と崇高」を頭に宿している彼は、売春婦の苦しみに無関心ではいられない。彼は、しかし、リーザにたいして「美と崇高」の行為をしないどころか、彼女をますます不幸にしようとする。彼は、彼女に絶望をうえつける。この「遊び」に夢中になり、彼女を絶望させてしまうと、彼は、混乱し、今度は、彼女を絶望からひきあげようとする。そのために、彼は、彼女を家に招待する。これは、彼女が売春婦であること、彼が彼女を金で買うお客であることを否定し、人間対人間の関係に二人が入ることを意味する。これは、彼が一人の人間の苦しみを引きうけること、「美と崇高」を夢想から行動へ解き放つことを意味するはずである。

このためには、「心の中の地下室」をすてなければならない。

若い地下生活者は、だから、恐怖を感じはじめる。彼は、すでに、「美と崇高」の行動の場がないからではなく、たとえそれが目の前にあっても、行動できず、「美と崇高」を夢想することしかできない人間になりかかっている。彼は、一人前の地下生活者になりつつある。

彼は、自分が売春婦を招待したことに腹がたつ。彼は、「彼女を侮辱し、つばをはきかけ、追いかえし、なぐりつけたい」ぐらいである。彼は、「心の中の地下室」をまもっている。ところが、一方では、夢想のなかで「美と崇高」ごっこが進行している。

「わたしは、たとえば、リーザを自分のところへ通わせることによって、彼女を救っている。彼女に話をし……、彼女をのばしてやり、教養をみにつけさせてやる……」⁽¹⁰⁾

彼女をふんづけたい、と、彼女を救いたい、とに分裂したままで、彼は、彼女をむかえる。分裂の苦しみにあえいでいる彼は、売春婦を救うどころか、自分を苦しめ分裂させている彼女から自分自身を救わなければならない。

彼は、次のような方法をつかって、彼女から逃げだす。

彼は、自分が売春婦を救うような「美と崇高」の次元にいないことを、彼女にふきこむ。彼は、自分を下劣にみせかけ、わざと自分を引き下げることによって、彼女の救済という次元から遠ざかろうとする。これは、自分のいる次元を変えることによって、問題の次元から離れようとする方法である。

彼は、頭のなかに「美と崇高」ごっこの常設の舞台をもちながら、現実に出番がくると、それを実行する資格のない次元へ自分をつき落とすことによって、行動からのがれるのである。

「わたしは、地上のあらゆるうじ虫のなかで、一番いまわしく、一番こっけいで、一番ちっぽけで、一番ばかで、一番ねたまし屋なのだ」⁽¹¹⁾

このようないまわし虫には、売春婦を救うことなど問題外にしてもらえはるはずである。だから、彼

は、うじ虫のなかのうじ虫に化けて、リーザの前に立つ。

これと同時に、彼は、自己を絶対化し、彼女の存在を、その絶対性の前でとかしてしまおうとする。

「自分の心が、かきみだされないためなら、今すぐにでも全世界を一カペイカで売りとばしてやる。」⁽¹²⁾

彼は、自分を全世界の上におく。そうすれば、一人の売春婦の苦しみなど、問題外になるはずである。このような自己の絶対化を、彼は、世界がほろびるよりも、自分がお茶を飲めないことのほうが重要だ、と表現する。自分のための一ぱいのお茶は、全世界の運命よりも大事だ、という発言は、リーザにむかって投げられている。それは、自分に「美と崇高」の行為を無言で要求する不幸な売春婦にむけて発射された弾丸である。全世界をひきあいにした自己の絶対化は、リーザから逃げだせるならば、いいかえれば、「心の中の地下室」をすてて「美と崇高」の行動へ自分を追いやらなくてもすむならば、全世界をたたき売ってもいいし、全世界がほろびてもいい、ということを意味する。

この自己の絶対化と、さきにのべた自己の下劣化とが、手を取りあって、彼をリーザから解放しようとする。

地下生活者は、リーザの苦しみよりも自分を上げる（自己の絶対化）ことによって、逃げ、それよりも自分を下げる（自己の不劣化）ことによって、逃げる。彼は、リーザの苦しみの次元よりも、自分を上げたり下げたりしながら、そこから自分を遠ざけていく。

彼は、この二つの手を使ったあとで、とどめをさす。

「お前のことなど、そして、お前があそこでだめになってしまうかどうか、などということが、自分にどんな、どんな、どんなかわりがあるんだ。」⁽¹³⁾

彼は、苦しんでいる人間とのかかわりを断つための操作を、この言葉でしめくくろうとする。

ところが、彼の方法は、予想もしなかった結果をみちびきだした。彼の方法によって辱められたリーザは、彼の方法を彼の苦しみのあらわれだ、と理解したのである。彼女は、彼もまた不幸である、ということに気がついたのである。

その内容はまったく別物でありながら、不幸と苦しみをたがいに背おっている、という共通性に、リーザは心をゆさぶられる。彼女は、上へ下へと自分を動かしながら彼女の苦しみと不幸から逃げようとしていた男の苦しみと不幸とを、つつみこもうとする。彼女は、「心の中に地下室」をもっている男をだきしめる。

彼女の抱擁のなかで、地下生活者は、自分の方法を行使できない。彼女の胸の中で、彼の三角形がくずれ去ったのである。彼は、操作なしに、裸のままの自分をだしてしまう。彼は、号泣する。彼は、非武装のままで、自分のもっともおそろしいもの——他人の苦しみ——にさらされている。「美と崇高」の活動へ彼をせきたてていく他人の苦しみに、地下室の外で、さらされている。

しかし、これは、一瞬だった。彼は、自分が素手で彼女とむかいあっていることに気がつくと、

すぐさま「心の中の地下室」をまさぐる。彼は、苦しむ者どうしの連帯の輪のなかへ入りこみ、行動することはできない。売春婦である彼女は、苦しんでいる民衆の代表として、地下生活者をつかまえている。

地下生活者は、彼女の〈共に苦しむ〉姿勢に一たん負けたが、すぐに我にかえり、民衆のうでからぬけだし、逃走にとりかかる。

「彼女が消え去ってほしかった。わたしは、『心のおちつき』がほしかった。地下室で一人きりになりたかった。なれていないので、『生きた生活』が、わたしを、息ぐるしくなるほどに圧迫したのである⁽¹⁴⁾」

生身の人間の苦しみは、「生きた生活」のもっとも生なましい部分である。「生きた生活」がか逃げかくれしている地下生活者は、その核に、その熱い部分にふれてしまったのである。すると、「心の中の地下室」が融けたのである。彼は、すぐさま、その再建にとりかかる。

地下生活者は、完全にたちなおるために、リーザに5ルーブリ札をにぎらせる。この紙幣によって、彼と彼女との関係を、客と売春婦との関係にひきおろし、「美と崇高」の行動の必要性から逃げるのである。彼は、売春婦を一人の人間として家に招待することから始った「美と崇高」とのかかわりあい、金によって解消し、「心の中の地下室」をまもる。

この一枚の紙幣は、リーザの頭上にとどめとしてふりおろされた下劣化の武器である。彼は、再び、自己の下劣化によって、逃げるのである。

5ルーブリ紙幣は、「美と崇高」の行動へひきよせられるのを防ぐおふだである。しかし、このおふだは、彼に「心のおちつき」をもたらすことはできない。

「わたしは、このような残酷なことをやった、たとえわざとだとはいえ、心ではなくて、わたしのよこしまな頭がやったことなのだ。この残酷さは、あまりにも見せかけのものであり、頭だけのものであり、わざとひねりだされたものであり、書物的なものなので、わたし自身一分もちこたえることができず、はじめは、彼女が目に入らないように偶こへとびのき、そのあとで恥ずかしさと絶望とを感じながら、リーザを追って走りだしたのである⁽¹⁵⁾」

リーザは、この札を残して、姿をけす。拒否された札を見て、彼は、とりみだし、混乱する。

地下生活者は、自分の方法をつかって「生きた生活」から、そして、「美と崇高」を実行する義務感から逃げつつけたが、問題そのものをなくすことはできない。彼は、リーザとの一件で発揮した「生きた生活」の処理方法を、「心のおちつき」が得られないままに、もちつづけ、みぎをかけ、中年のしたたかな地下生活者になったのである。

7

理想社会を夢み、その建設事業の英雄に、歴史の主人公になろうと夢想していた青年は、理想社会を夢みる者に義務としてつきまとう「美と崇高」からだけでなく、「生きた生活」そのもの

から逃げ、しかもなお理想社会への願望を心の奥底に秘めながら、「反英雄、反主人公」のあらゆる特徴をおびた存在——地下生活者になってしまう。

「反英雄、反主人公」とは、地下室の英雄、主人公である。

地下生活者は、自分一人だけについて語っているふりをしてきたが、自分を時代の多数派だと考えており、一まず手記をしめくくるにあたって、彼は、主語をわれわれという複数形に変えてしまう。

「われわれは、時どき、本物の『生きた生活』にたいして何らかの嫌悪を感じるほどに、生活から縁どおくなっている。だから、『生きた生活』のことを思いだすはめになると、われわれは、がまんできないのだ。われわれは、本物の『生きた生活』を労働のように、ほとんどお勤めのようにみなしかねないし、われわれは皆、心のなかでは、書物式の方がましだという点で意見が一致している。全くわれわれは、こんなところにまで行きついたのだ⁽¹⁶⁾」

「書物式」というのは、この場合、多かれ少なかれ地下生活者流の方法で「生きた生活」から身をかわすことである。心がそれと切りはなせないなら、頭だけを使ってその関係をたちきってしまう試みである。それは、観念と意識の操作である。

地下生活者は、自分の方法をわれわれの方法だとよび、それを一般化する。

彼は、皆をまきぞえにしながら、更に一步でる。われわれは、「生きた生活」をやっかいに思うことから進んで、人間であることをやっかいに思うのだ、と彼はいう。

一人の売春婦の苦しみか、彼を追いつめたのは、彼が人間だからである。他人の苦しみか自分がおちつかせないという人間性が、彼になれば、そんなことはおこらなかったはずである。人間の苦しみか問題にならなければ、理想社会の建設も問題外になる。「美と崇高」に責められることもない。

地下生活者は、自分の方法で自分をささえることに疲れている。この疲れをとるために、いっそのこと人間を廃業したい。そうすれば、あのような方法を使う必要がなくなる。

地下生活者は、こんどは、自分の方法から逃げるのである。

「われわれは、人間であること、本当の、自分自身の体と血をもった人間であることを、重荷に感じてすらい。われわれは、このことを恥じており、不名誉なことだと思っているので、かつて存在したこともない一般人間とでもいうものになってやろうとねらっている⁽¹⁷⁾」

「一般人間」とは、地下生活者が毒舌のかぎりをつくしてやっつけてきた、あの水晶宮の住人のことである。それは、蟻塚の一員である。それは、個性をうばわれ、個人の可能性を局限されている人間のことである。それは、個の特徴をうばわれ、一般的な特徴しかもつことを許されていない人間なので、「一般人間」というのである。「一般人間」は、「石の壁」のこちら側でつくられる人間である。なぜなら、個性は、「石の壁」の向う側にあるからである。

「一般人間」は、地下生活者がもっともなりたくないはずの人間である。「石の壁」から始まった彼の発言は、「一般人間」を生みだす社会（水晶宮）への批判であった。ところが、その批

判者が、いっそのこと「一般人間」になった方がましだ、と云っている。

これは、人間をやめるには「一般人間」になるしかない、という意味で、「一般人間」への批判であると同時に、やっかいな操作の必要性から解放されるなら、「一般人間」になった方がいいという気持の表明である。これは、地下生活者であるよりも、「一般人間」の方が、いっそのことましだ、ということである、

地下生活者の分裂の幅は、ここで、最大限になる。

地下生活者は、こうして、全的に生きる願望と、「一般人間」への逃避という二極をもつことになる。地下室は、この両極をかかえる。地下室は、広いのである。この広さは、相対立する両極間の距離をあらわしている。この距離は、逃げつづける知識人の心の複雑さを表現している。

地下生活者は、一方の極である「一般人間」にふれてしまった。このあと、彼が、どうするかは、もうすでに明らかである。分裂し、動揺し、逃避する人間がおちいりやすい、いっそのこと、という穴へ落ちると、彼は、すぐに観念と意識をあやつって、そこからはいだすのである。つまり、彼は、「一般人間」にもなれず、したがって、人間をやめることもできないのである。

彼は、どちらかの極へ無限に近づこうとするが、一方の極にさわると、今度は、身をひるがえして、他の極へ向う。彼は、どの極にもおちつくことができない。彼は、どの極からも逃げつづけることになる。だから、「一般人間」には、意識の上でも、なれないのである。

地下生活者の使うどの操作も、安楽いすではなくて、一時しのぎの止まり木にすぎない。

したがって、地下生活者は、地下生活者としてとどまり、あの四楽章からなる音楽を永久に演奏することになる。

地下生活者は、何者にもなってしまうまいように、自分の方法を駆使する。地下生活者の方法とは、結局、地下生活者でありつづけるための方法になる。それは、したがって、何者にもならないための方法である。それは、「生きた生活」をさけるための、地下室という自家製の避難所に居つづけるための方法である。

彼は、地下室にすわるために、自分自身を永久に操作しつづけなければならないのである。

地下生活者は、何者にもならないように、意識と観念の操作をしつづける知識人である。

何者にもならないとは、逃避の最も完全な方法である。

現実と理想社会との両方から逃げる地下生活者型の知識人は、特殊ではない。多かれ少なかれ地下生活者的な操作をしている者が、多数派をつくっている。

これとは逆に、理想社会をになうもの、その建設のために進んでいく者は、少数である。彼らは、特殊なので、「おかしな人間⁽¹⁸⁾」や「白痴⁽¹⁹⁾」にさせられてしまう。

地下生活者の一般性は、『カラマーゾフの兄弟』のなかでの検事の発言と、ひびきあう。

「われわれは、このうえもなく気高い理想にとりつかれてさえている、まさにとりつかれているのだ、ただし、理想がひとりで達成され、棚からぼたもち式にわれわれにもたらされ、そして、これがかんじんだが、無料で、無料であり、理想のために全然支払わないでいいという条件つき

で、なのだ。われわれは、支払うことは大嫌いだ、そのかわり、受けとることは大好きだ。これは、どんな点においてもだ⁽²⁰⁾」

地下生活者は、理想社会を夢みても、棚から何も落ちてこないで、「泥」のなかに入った。しかし、「泥」のなかで理想が頭をかすめるのに苦しんだ。その理想の当然の姿勢としての「美と崇高」の要求に、いらだった。逃げ腰の理想主義者は、結局、理想のために「全然支払わない」ことを自分の掟にした。彼は、このため、観念と意識の永久運動に身をなげこむはめになった。「全然支払わない」ことは、おそろしく高くついたのである。逃避は、高くつくのである。

ドストエフスキイは、「支払わない」方法をあばくことによって、近代の知識人の一典型をつくりだした。

ドストエフスキイは、『地下室の手記』において、理想社会にたいして何も「支払わない」人間をえがくことによって、理想社会の問題を展開したのである。

〈注〉

- (1) ドストエフスキイの作品『地下室の手記』(1864年)の主人公。ドストエフスキイの発展過程における、この作品の位置づけおよび評価については、『ドストエフスキイの文学と埴谷雄高氏の方法』(『文化評論』1973年9月号)でふれたので、本稿では、理論的考察のみにしぼった。
- (2) チェルヌイシェフスキイの『何をなすべきか』の女主人公の夢にでてくる未来の理想社会が、水晶宮とよばれている。ドストエフスキイは、この作品で、もちろん、チェルヌイシェフスキイと論争しているが、水晶宮をチェルヌイシェフスキイの作品との関係だけで考えることはできない。ドストエフスキイが、ペトラシエフスキイ会に参加していたときに読んだ、フーリエのファランステールとその同類が、水晶宮という名のもとに一括されている、と考えられる。水晶宮とは、空想的社会主義の特徴をあつめて、建造物化したものである。
- (3) Ф.М.Достоевский, Полное собрание сочинений, т.5, "Наука", Ленинград, 1973, стр.115. 『地下室の手記』の引用については、以下、この本のページ数だけを示す。
- (4) 115
- (5) 121
- (6) 120
- (7) 133
- (8) 132
- (9) 128
- (10) 166
- (11) 174

ナジロフは、『「地下室の手記」の倫理的問題について』のなかで、この部分を引用し、地下生活者は、ここで「自分を低めながら、高まっている」(унижаясь -- возвышается)と、書いている。しかし、本稿でのべたように、自分を下げる行為と自分を上げる行為(自己の下劣化と自己の絶対化)とを区別しなければならない。自分を下げることは、「自分の例外性」のあらわれだから、自分を上げることになるのだ、というナジロフの論法では、地下生活者の方法を十分に解明できない。

Р.Г.Назирова, Об этической проблематике повести "Записки из подполья". В кн.: Достоевский и его время, "Наука" Ленинград, 1971, стр.151.

- (12) 174
- (13) 同上
- (14) 176
- (15) 176-177

- (16) 178
- (17) 179
- (18) 『おかしな人間の夢』(1877年)の主人公。
- (19) 『白痴』については、著者の論文『ドストエフスキイとムイシキン』(『大阪外国語大学学報』、第41号(文学編)、1978年)を参照。
- (20) Ф.М.Достоевский, Полное собрание сочинений, т.15, "Наука", Ленинград, 1976, стр.128.